キューポラのある街

青春長編小説

1

青春長編小説／第１部

キューポラのある街

早船ちよ

理論社刊

青春長編小説（1）
キューポラのある街—定稿版—

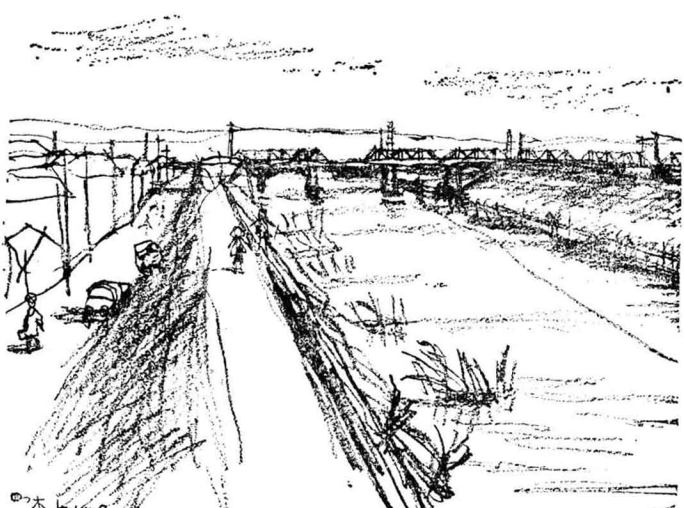
© 1967 年 8 月′ 第 23 刷

定価 360 円

作　者　　早　船　ち　よ
発行者　　小　宮　山　量　平
東京都千代田区神田神保町１の64
発行所　　株式会社　理　論　社
電話東京（294）6501(編)
（294）6504(営)
振替口座 東京 95736

たくさんの壁
その壁をのりこえる
たくさんの伸びゆく者たち
——に

早船ちよ
キューポラのある街／もくじ



もくじ

1 生むこと、生まれること／5
2 少年とゆがんだ電柱の影／22
3 口紅のにおい／42
4 パチンコ横丁／58
5 ほんとうの生活／75
6 夜の工場街／94
7 初冬のあさ／109
8 職人気質／117
9 キューポラのある街／126
10 生きてゆくためには／142
11 わたしのふるさと／156
12 はなむけ／171
13 車輪のおと／184

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

14 しごとから学ぶ／196
15 祝　祭／210
あとがき
—生活のだいじなところで／228

函・表紙・とびら／鈴木　義治
カット／久米　宏一

作品取材に工場を訪れる作者（右）

1　生むこと、生まれること

（今夜あたりくるな）

その予感が、ジュンの気もちのなかに、なかったわけではない。

ジュンは、中学校の補習からのかえりに買ってきたコロッケを、夕食のチャブ台にならべた皿へ、二つずつくばりわけていた。

かえりのおそい父と母のぶんは、経木のつつみに分けのこしておく。まず、さいしょに弟のタカユキへ大きそうなのを二つ、つぎは叔母のハナエへ、そしてじぶんの皿にも二つのせる。肉屋は、五〇円で、コロッケを一つまけてくれた。

（きざみキャベツを、このごろ、つけてくれなくなったな）

ジュンは、その一つのコロッケをはさんで、ちょっとためらった。食いしんぼうのタカユキが舌なめずりをして、熱心にこっちをみているのが感じられるからだ。

――これを、まるごと一つ、タカユキにだけあげるのは、不公平よ。だって、おばちゃんは、も

うすぐ赤ちゃんを生むんだもの。よけい食べさせてあげなきゃ。
　ハナエとタカユキのために二等分しようとして、惜しくなった。ジュンは、ひとつあまったコロッケを、きちんと三つにわけて、また、チャブ台の上の三つの皿へくばりそえていく。
　そのとき、とつぜん、叔母のハナエがいった。
「もしも、今夜あたりに……」
「え？　何かいった、おばちゃん」
　ジュンは、あわてて聞きかえす。きざんだキャベツを分け、その上へ、にんじんの新芽をそえて、もりつけを美しくしようとしていた。ハナエの話しかけるのは、耳にはいらなかったのだ。
　ハナエは、ソバカスの目だつ鼻に、小じわをよせて笑いかけながら、
「いえね、こん夜、かあちゃんのるすの間に、赤んぼが生まれそうになったら……」
　さっと、ジュンの顔いろがかわった。
「えっ、ほんと。ほんとに生まれそうなの」
　びっくりしたときの目をみはって、手をとめたまま、ハナエをまじまじと見る。
「ちょっと、そんな気がしただけさ。そしたら、ジュンとタカユキだけだから、どうしようかな……」
　すると、小学五年生のタカユキが口をとんがらせた。
「へっちゃらだい。安井産院へそういっていきゃ、いいんだろ」
「いいに行ってくれる、タカユキ？」
「うん、ぼくにまかしとき」
　ハナエは、タカユキにご飯をつけながら、
「ところで、ジロー親分。押入れのなかのでかいフトン袋、しょっていってくれる」
「うへっ！　あいつを背負うの」
　頭へ片手をやるタカユキを、ジュンは姉らしく気をおちつけて冷やかす。
「よわ虫！　背負えないんだろ」
「ふうーんだ。そんなら姉ちゃん背負ってみろ」

ジュンは、それには答えないで、煤けたボンボンどけいを見あげる。七時一〇分だ。
（あと、二時間だ……よしんば、いま、それが始まったって）
九時になれば、母がビニール工場の夜業をすませて帰ってくるだろう。それに父……だが鋳物工場の〈炭たき〉職人である父は、きょうは三日おきごとの〈湯出し〉の日だから、帰りは夜なかになるはずだった。
ジュンは、なにげない顔をふせかげんに、食べることに熱心そうにしている。だが、ときどき、上目づかいにハナエのようすをうかがった。
ハナエは、箸をときどきやすめて、なにかをはかるように、じいっと、外をうかがう目をした。顔色が、ふだんより青ざめてみえる。
のきば近くで、クルクルウー、クルクルウーと、ハトの鳴きかわす声がした。タカユキは、にっこり箸の手をとめて、その方へ顔をむけた。
「ハトのひながかえるんだぜ、おばちゃん」
「そう。そんなら、いま、卵をあっためてるとこなのね」
ハナエは、まどぎわまで立っていって、耳をすます。
（ハトは、もう生んでしまった。けど、ひなはまだ、生まれてこないんだわ）
タカユキの灰ゴマ色の伝書バトのメスは、一〇日ほど前に卵を二つうんで、巣についているのだ。
「ねえ、おばちゃん。あと七日で、ひなのメスとオスが卵からかえるんだぜ」
「メスとオス？　そうはっきり、一羽ずつときまっているかね」
「そうさ。ハトはいつだって、メス・オス一羽ずつそろって、かえるんだよ」
「ふうん、ハトって、生まれるときから仲よしなんかね」
「ハトは、卵から一七日めに、ちゃんとひなになるんだ。ほかの鳥なら、メスだけで卵をかえすだろ。伝書バトなんて、かわりばんに、オスも卵を

あっためてるんだぜ」
タカユキは、いばった顔をする。
「まあ、オスもねえ」
——人間よりか、このハトに生まれついたほうが、ましだったわ——と、ハナエは吐息をつく。
——赤んぼが生まれるというのに、この子のとうちゃんは帰ってこれないじゃないか。
ハナエの夫の啓吉は、天草の船主の八〇トン漁船に乗組んだ臨時雇いの機関士だった。若松通いの石炭船からのりかえて、去年の暮のサバ漁にでていった。そのまま、李ラインを侵犯したというかどで、威嚇射撃をうけ、船ごとつかまってしまった。釜山の刑務所に収容された——という便りがあったきり、それから一〇カ月近くなるのに、いつ帰ってこれるのか、目あてがつかないのだ。結婚して二年めのハナエは、啓吉が帰ってくるまで、下宿の世帯をたたんで、姉夫婦のいる、この鋳物の町・川口のジュンの家へころがりこんできたのだった。

タカユキは、父の辰五郎からは〈ひねくれ者のジロー〉と、あだ名でよばれている。食いけ盛りで、盗み食いばかりでは足りずに、父母のるすをねらって、小銭を持ちだしたりする。ハナエも、この家へきて一カ月ばかりの間に、二度やられた。それがばれたときの、ふてくされかたは、可愛げがなくて、ハナエは好きになれなかった。だが、そういうときのごまかしと、いいのがれのためのグズなずうずうしさとはちがって、ハトの話をしているとき、おやと思うほど、タカユキの目はかがやいてくる。
「ね、おばちゃん。ハトは、メスもオスも、ひなにおっぱいをやるんだぜ」
「おっぱいを？　まあ、オスが、どうして出すの」
「ううん。鳥はメスだって、ふつうは、おっぱいださないさ」
「わるい子、おばさんをかついだのね」
「ちがうよ。ハトは、ひなを育てるとき、おっぱ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いみたいなものを、だすんだよ。ノドから」
「へええ……」
「口うつしに、ひなの口へながしこんでやるのさ。そやって、ひなを育てるにも、メス・オスいっしょなんだよ」
「ジロちゃん、よく知ってんのね」
ジュンも、たべる手をとめて、弟を見なおす気もちをこめていった。
「そんなに仲よしだからなんだね。ハトは、平和のシンボルだって」
タカユキが、首をよこにふった。
「ちがう、ちがう。ハトのケンカはすげえぜ。もっとも、オスとオスのケンカだけどさ」

*

とけいが、八時を告げた。
「おやすみ、おばちゃん。あかんぼ、生まれそうになったら、いつでもたたきおこしていいぜ」
タカユキは、いつものように、すぐ、ねどこへもぐりこんでしまった。ラジオを枕もとへおいて、プロ野球のナイターの放送をきくのだ。
ジュンは、進学準備の宿題の数学にとりかかる。その机のわきで、ハナエは生まれてくる赤んぼうのためにおムツをぬいそろえている。
八時三〇分。
ジュンは、とけいのセコンドが耳についてなかなか、勉強のなかへはいりこんでいかれない。
「おばちゃん。とうちゃんとこ、ストの相談するなんて、いってなかった？」
「あんな小さな工場、ストやったら、つぶれちゃうよ。それに、働いているみんなだって、とうちゃんとおなじこと。一日でも働かなかったら干あがっちゃうものね、ははは……あっ、痛っ！」
ハナエは、ぬいかけのおムツをなげだして、前こごみになる。
「だいじょうぶ？　おばちゃん」
ハナエは、血の気のひいた顔をあげて、痛みを耐えながら、じぶんにいい聞かせるようにいった。
「ジュン。びっくりしなくてもいいのよ。お産は、

こわいことじゃないんだから」
「ね、もう、うまれそう？」
「うん。いっしょに、安井産院までいってちょうだい」
「え、いくわ、いくわ。持ってくものは」
ハナエは、立ちあがって、
「この棚の上のフロシキづつみに……」
手をのばして取ろうとして、よろめいた。
「あ、あっ！」
「あぶないわよ」
ジュンは、ハナエをうしろから支えようとした。ハナエは、うろうろと、座敷を一まわりする。その着物のすそに払われて、ぱらぱらと水のとぶのを、ジュンは見た。
「ジュン、水がでちゃった」
「あ、羊水？」
ジュンは、おもわず息をのんだ。羊水は、赤んぼうが生まれるとき、胎児をおしだす働きをする。女子だけの〈保健体育〉の時間に、ジュンらは、そう教わった。それが早く出るというのは……ジュンは、あわてて、何をしたらよいかわからない。ハナエの肩に手をかけて、おろおろする。
「しっかりしてね。ね、おばちゃん」
「ううん、破水しても……」
ハナエは、かがみこんで、額に手をあてて、何かに耐えながらいう。
「でも。すぐには生まれやしないよ、ジュン」
しかし、ハナエにとって、はじめてのお産である。——早期破水……難産——最悪の場合のことも考えに入れておかねばならない。ハナエは、自分もおろおろしているのに気づきながら、戸口へそろそろおりる。ジュンは、ちらっと、とけいを見あげる。八時四〇分すぎ。
「もう、九時にちかいもん。かあちゃんだって帰ってくるわよ」
ジュンは、自分にもいいきかせながら、手早くフロシキづつみをかかえて、戸口のタタキへとびおりる。ぞうりだ。ハナエのぞうりを、そろえて

出す。そのビニール製のが、なかなか叔母の足ゆびにつっかからない。ジュンは、ふるえる手で、持ちそえて、はかせてやる。

*

安井産院は、露路を出て五〇〇メートルほどいって、表通りに面した町並へでると、すぐにある。途中は、ゴミゴミした小住宅と、ところどころに小店と、トタン塀の小工場がまじっているドブ川沿いの道である。

一〇〇メートルもいくと、ハナエはしゃがみこんで、陣痛にたえた。

「おばさん、だいじょうぶ?」

「あ、……いた、た」

ジュンは、一気に走り着きたい気持をおさえて、しゃがみこみ、ハナエの手をとった。

しばらくすると、ハナエはたちあがった。そのまま、ジュンにもたれかかるようにして、そろそろ歩いていく。

すこしいって、また、しゃがみこんだ。肩で、大きな息をしたまま、かすかにうめいた。

「おばちゃん、おばちゃん」

「……」

「だいじょうぶ、おばちゃん」

「……」

「ね、生んじゃいやよ。ここで生んじゃいやよ」

「うーん……、だいじょぶ。あーあ、つらかった」

ハナエは、きゅっと唇をむすんで、あぶなっかしい足どりで、またあるきだす。

ふいに、九時をしらせるチャイムがなった。ジュンは、虚をつかれて、どきんとした。動悸がはやくなって、なかなかしずまらない。そのとき、うしろで叫ぶ声をきいた。

「おうーい、おばちゃーん」

「あら」

二人は、立ちどまった。

「おうーい! ねえちゃーん」

「タカユキだわ」

仲秋にちかい半月が、人影をぬうっと浮かびあがらせる。それが、走るようにして近づいてくる。ハナエが、おどろきをこめた声をあげた。
「まあ、お前。フトンを背負ってきてくれたの」
「タカユキ、よく目がさめたな」
ジュンもおどろくのに、それには答えず、タカユキはフトン包みが歩いていくようなかっこうで、二人をおいこしていく。すりぬけざまに、この親分は、どなるようにいった。
「おれ、先にいって、安井さんに、よくたのんどくからな」
いつものグズとは別人のような、シャンとした声音である。

*

ハナエが案内された産室には、タカユキのしょってきたフトン包みがひろげられ、ベッドのしたくができていた。
三〇才ぐらいの体格のいい助手が、いった。
「さ、このベッドへ横になってくださいよ。いま、難産で、院長先生の手がはなせないんです」
「難産って……どうしたのですか」
ハナエは、ドキッとした顔でうけとめて、不安げに、ジュンの方をふりむいた。ジュンは、廊下のむこうの、あわただしい気配をうかがうように耳をすました。
「子癇なんです。ひどいケイレンがきちゃってね、子宮口が開ききっているのに、もう一時間も、赤ちゃんがうまれないでいるんですよ」
助産婦の資格をもつ助手は、なれた手つきで、ハナエにてつだって、腹帯を、するするっと、といていく。
「じゃ、切開ですか」
「まあね。いま、市民病院のO博士にきていただいて、内診をおえたとこですよ」
「あ、いた……」
ハナエはベッドによりかかって、からだをエビのようにまげる。
「強くきますかね。さ、おじょうさん。産婦さん

の手をもってあげてください」
助手にいわれて、ジュンはあわてて、ハナエの手をにぎった。その手は、いたいほど強くにぎりかえされる。助手は、血色のいい太い腕を、ひじまでむきだして、ハナエの腹をさすりはじめた。
「このへんでしょう。……何分おきぐらいに痛んできますか」
ハナエは、痛みが遠のいたところで、ほっと息をついた。
「はあ、五分おきぐらいに」
「強くさしこんできますね。……ああ、そうだ。ついでだから、O博士に、ちょっと見てもらいますか」
ハナエは、すこし考えてから、うなずいた。
「じゃ、博士にひとこと頼んできますから、おまちになってね。おじょうさんは、そのまま。そうそう、そうして、みててあげてください」
助手は、ジュンに——かわったことがあったら、三室へだてた廊下のならびの産室へよびにくるように、いい残して出ていった。
「子癇って、どんな病気？　おばさん」
「とっても、こわいそうだよ。ガタガタ、フルエがきて、痛くて気が狂いそうになるんだってさ」
そのとき、犬が遠吠えするような呻きごえが、むこうの産室から、きこえてきた。部屋が近いせいか、その産室のけはいや、金属の器具のカチャカチャふれる音など、はっきり聞える。
「死ぬの？　子癇になると」
「たいてい、助かるんだそうだけどね。……あ、いた」
ハナエの陣痛のきざみが、間がちかくなった。いったん痛みが遠のいて、ひといきついたかと思うと、つぎの痛みが潮のよせるようにおそってくる。
「ジュン、また、手をかしてよ」
「おばちゃん。きつく握るといいわ」
「痛いよ」
「がまんしたげる」

しかし、ハナエは、ジュンの手に力をいれることさえかげんして、がまんしているようだった。
――わたしを、こわがらせまいとしてるんだわ。こどもだから、とおもって。
ジュンは、ハナエの額に、じっとり浮いてくるあぶら汗を、ハンカチでふいてやりながら、自分よりたよるもののないこの叔母が、しきりに気のどくになった。わざと明るい、いたずらっ子らしい声をつくっていった。
「啓吉おじさん。いま、赤ちゃんが生まれるなんて、知らんわね。きっと」
「知ってたら、そりゃ、朝鮮海峡なんかとびこえて、すっとんできたくなるだろうにね」
すうっと、音もなく、ドアがあいた。ハナエもジュンも、はっとして、待ちかねた目をそっちへむけた。だが、ジュンの母の姿はそこになく、フロシキ包みだけが、ぬうっと出てきた。
「ねえちゃん、これ」
タカユキは、ドアのかげにかくれて、フロシキ包みだけを、つきだしているのだ。さっき、ハナエが用意してあるといった二包みの荷物のひとつである。
「まあ、タカユキ」
ジュンは、びっくりした。よく気がついた――とほめることさえ忘れて、むしろ、あきれ顔で弟をみた。
「かあちゃんは？　タカユキ」
「まだ、かえってこない。それで、工場までいいにいったんだ。すぐ、とんでくるってよ」
タカユキは、殺風景な産室内をこわごわ見まわし、鉄わくのはまったベッドにねているハナエを、のぞいてみた。そのときまた、けもののような呻きごえが、向うの部屋でおこった。
――うー、うーわあ、わわわわあ……
「おっ！　ありゃ、何じゃ」
「病気の産婦さんだってさ」
呻きごえは高く、苦しげな尾をひいて、あえぎ、あえぎ、救いをもとめている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.